

高山善吉翁遺稿集 (三)

高山善吉

(故賛助会員 佐伯市渡町)

『佐伯の歴史と文化』

No.三五 佐伯藩の産業振興

藩祖、毛利高政公時代の産業と言えば、農林水産業以外に、何をにおいても領民の『食の生活の安定』を第一に考えなくてはならなかったが、領地の広さに拘わらず、農耕に適した平坦地が狭く、九十%前後を山林が占めるため、米を初めとする食料の確保に大変苦労した。

特に、関ヶ原の戦い後の十年間は、織田・豊臣・徳川による天下統一の闘いが続き、佐伯氏統治から毛利氏藩政に移行して暫くは、軍役や築城のため、武士はもとより地域住民まで夫役に借り出され、食糧増産や産業振興にまで力が及ばなかった。それがため江戸中期の六、七代藩主の頃まで、山間部はもとより海岸部まで、六、七百メートルの

山を裾から開墾し、農地を拓げ、麦・粟などの穀類を植え米の不足を補ってきた。幕府の奨励による甘藷の植え付けによって、ようやく充足することが出来た。

この後、藩では農業・林業を中心とする産業開発・産業振興に力をいれることになった。

その例として「木炭」「和紙」「椎茸」「山茶」「製蠟」「みかん」「畜産」等がある。

木炭生産―広葉樹で覆われた天然の雑木林に「炭焼窯」を増設して

農閑期の副業として「木炭」の生産を始めた。

はじめ、青山の黒沢から山の口、大越の二箇所に官営の炭焼窯を設置し山奉行に管理させ、後、赤木、仁田原、因尾と五ヶ村に増設して年間二万四千俵の生産を行った。



天保年間には倍の五千俵生産に達し、上方で「佐伯白炭」として評価されるようになった。

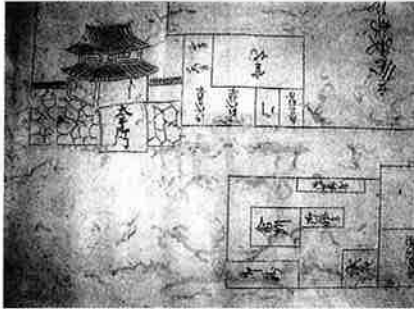
この木炭の歴史は長く、幕末から昭和三十三年頃まで続き、当地は木炭の生産地として全国的に有名となった。

「木炭」「石炭」等の固形燃料から「油」の液体燃料に変わる所謂燃料革命まで続いた。

和紙生産―伊予大洲藩から技術者を招き「第二の副業」とした。

和紙は、八代藩主高橋公の時代に、奥方の出身地である伊予、大洲藩より紙漉の技術者を招き、上・下直見、上野、切畑、中野、因尾の六カ所に「楮」の苗木を植え付けさせ生産を始めた。

上内町（現在の仲町銀天街入口・ヤノメガネ付近）に「紙座」を設け、各村の生産品を集荷し販売した。その販売は藩が一手に行っ



佐伯藩内町図―紙座（右下）

た。主に板紙、半紙、ちり紙等々で、品質が強靱で美しい、「佐伯紙」として有名になり、多量に生産したので藩庫の収入を増やし、財政的に大きく寄与した。終戦後は、佐伯市弥生大字上小倉の市原さんが冬の間に最近まで生産していたが、現在は生産していない。

椎茸栽培―木炭や和紙より早く生産。

椎茸栽培は、寛永年間（一六二四―四四）に、藩内（津久見市千怒）の源兵衛という人が、当時竹田、岡藩であった宇目の西山で炭焼きをしていて、傍らに積んであった原木の切り傷に胞子が飛んで立派な茸が生えているのを見て、自ら、鉋目法なためという技術を開発し広めた。

現在の原木に種駒を打つ方法の元祖で、全国的に豊後茸師として活躍し、この技術を広島・静岡・奈良・鳥取などに行き教えたと言われている。

その後も栽培技術の改良・普及に力を尽くし飛躍的な増産をみた。

佐伯は、品質・数量ともに椎茸の日本一の生産地となった。

これも、宇目・本匠を始め、藩内の山間部が、クヌギ・

ナラ・シイ等の広葉樹の林野面積が広い事。四、五月の春子のシーズンの気温が十三度から二十度である事。しかも一ヶ月の降雨量が一三〇〜二〇〇mmという椎茸の生育に適した自然条件に恵まれていたからである。

栽培農家の増加と乱伐で原木不足を生じ、一時的に衰退したが現在では、県下一帯、特に玖珠・日田・三重・九重を中心に生産されている。



山茶―番匠川上流の因尾・中野地区に小規模に自生したものを用業的に栽培。

番匠川の上流、因尾・中野地区では、狭い河谷で排水の良い秩父古生層（石灰石層）を利用して山茶を生産している。石灰層は山茶に適しており、山腹斜面の段々畑で霧の発生しやすい自然条件と相まって、香気高い優良茶を生産している。量的には少なく売り出すほどの量ではなかった。

現在では福岡方面にまで手広く販売している。

製蠟―はぜの木から蠟をつくる。

私がか子どもの頃（大正初期から昭和一桁時代）には、佐伯鶴城高校グラウンドから五所明神までの臼坪川の両岸の土手や向島から女島に至る中江川の両岸の土手に「ハゼの老木」の並木が数十本あり、秋にはハゼの実が沢山取れた。中村地区の本通り入口の宮崎家で蠟燭を製造していた記憶がある。

ミカン―発祥の地 津久見

ミカンは、津久見が発祥の地であり、初代高政公が奨励して以来、海岸部に広く植え付けるようになった。

品種も当初の温州から始まり八朔等の甘夏柑へと拡大し、品質・品種改良が進み多様化している。



現在では広くカボス栽培に転換され、ハウス栽培が普及するに至った。

畜産―藩直営の牧場を中心に

当時としては肉牛や乳牛・豚などは少なく、主として乗馬用(駒)、農耕用(駄馬)の馬が主であった。

牧場としては、「八島」「屋形島」に武士の乗馬用として必要頭数が飼育されていた。その内訳は、乗馬用七五〇頭程度、農耕用一九〇〇頭程度、計二六五〇頭程度で、その所在は在方(山間部)二五〇〇頭程度、浦方(海岸部)一五〇頭程度、計二六五〇頭程度であった。

このように広葉樹の天然の雑木林を活用して、副業としての「木炭」「椎茸」「ミカン」「和紙」「製蠟」などに力を入れ、年々その品質の改良に研究・努力により「木炭」「椎茸」で日本一の成果を挙げることが出来た。

従って米・雑穀のみでは二万石の貧乏小藩に止まるどころ、これらの農産物を藩外に売ることによって所得や収益を大幅に伸ばした。漁業の飛躍的發展振興を加える事により、領民の生活も漸く豊かさを感じ出来るようになった。

僻遠の小藩ながら藩士を始め、領民の教育施設や、当時としては高価な輸入書籍の購入等、藩庫を傾けてまで文化事業に投資できたのも、すべて産業振興に負うところが多大であったと存する次第である。

しかしながら藩政時代の林業は天然の雑木林が中心の副業であつて、現在の如き松・杉・檜等の建築用木材の計画造林を可能にする条件は整備されていなかった。

高い山林に育った成木の伐採を始め、重量物にして重・厚・長・大の木材の搬出、運搬の道路一つをとつても、全く整備されておらず、藩政時代は番匠川で筏を組んで、城下町の入口であつた角石付近で陸揚し、専ら人力や牛馬の利用に依存した。必要最低限の需要を充足する程度であつた。

以上、わが藩内の農業・林業に関わる産業開発・産業振興の足取りを述べた。

No.三六 藩政時代の林業と現況

わが大分県、藩政時代の豊前・豊後は、かつては農業県であつたが、現在は九州一の工業県に成長し県民所得は、福岡県を凌駕してトップとなつた。

しかし、九州農政局の調査では、鹿児島県の四五〇〇億円をトップに、熊本県(二位)、宮崎県(三位)が三四〇〇〜三五〇〇億円に比べ、わが大分県と長崎県は、福岡県(四位)、佐賀県(五位)に次いで約一四〇〇〜一五〇〇億円程度で、その大分県でも県北の宇佐平野等に比し、県南、特に佐賀関以南の地域は、豊肥沿線を除き、農業生産額は低く、その振興が求められている。

藩政時代からの歴史的な農業の自然条件に影響されていることは勿論であるが、昨今の林業不振、特に安い外材輸入による打撃が、日田地区とともに当地の林業不振に拍車をかけ、かつての農業所得の足を引つ張っているものと推察する。

戦後の農業・林業の足取りと近況を若干申し上げたが、何と言つても、わが藩は「漁業」の振興によつて二万石の小藩ながら、佐伯文庫八万巻の購入で知られるように、江戸中期以降は英明な藩主を頂点に、領民の協力・奮闘の甲斐あって、伝統・文化の華咲く地域として発展し維新を迎えることができた。

今日の如く、能率良く帯鋸で多量に製材可能な時代を迎えたのは、大正初期以降のことである。

ここ百年の歴史で、「わが町佐伯は第二次産業の嚆矢として、木材工業が日田とともに確立された。」と申して良いと存ずる。

No.三七 第二次産業としての木材産業

この木材産業の近代化で、わが町佐伯は既存の漁船中心の中小型造船業を、大東亜戦争中に軍需物資の輸送の戦時標準型帆船の増産を、東造船株式会社で取り組んだ事が、今日第二次産業のトップとして造船業が(木造船が戦後鉄鋼船に代わったが)木材産業を凌駕するに至った原因である。

従つてわが町佐伯の産業の浮沈や盛衰は、木材産業、即ち原木の生産・造林を担当する農家とその製品化を担当する製材業の好・不況により影響を受けることが大きい。造林は三十年乃至五十年のピッチで成木の伐期を迎えるため、偶々伐期を迎えた時期の市況が、造林の意欲に多大な影響を与える。

我が町佐伯は、この「林業」「製材工業」の不振で、かつての活力を失い、その対策が議論されている。

かつては、わが地域を代表する産業のここに至った経緯

を問い、地域の抱える林業の明日を考えてみたいと存ずる。

戦前の大東亜戦争突入後から戦後の約三十年間、わが町佐伯の第二次産業として、県北西部日田と共に中心産業に成長した木材産業の発展は、明治維新以後からである。

藩政時代は、広葉樹林を中心とした雑用林から百姓の副業として使用されてきた。特に建築用材として木材需要が格別に多いわけではなく、又造林のみで生計を立てるなどは、到底望むべくも無かった。

当時は御立山と呼ばれる藩有林の夫役が中心で、私有林の面積はかなり限定されていた。「部落共有林」として造林に励んでいた記録が残されている。

又、一般に住居建築は一生一回限りで、婚姻して別世帯を持つための建築は、よほど富農で財産家だけに限定されており、大半は分家よりもむしろ寧ろ、三世代同じ屋根の下に暮らし、子沢山で狭くなるか、老夫婦が隠居して建て増すかで、木材の需要はほとんどなかった。

住居も「武士」と「百姓」「その他の階級身分」によって大小区別された。

百姓の場合は、概ね四部屋（座敷・納戸・広間・茶の間

一十畳・八畳・六畳×二）が基準で、後土間（寒い季節に屋内の農作業の縄や俵作り、その他に使用する場、炊事場として使用）があった。外廊下伝いの便所は少なく、屋外の近い場所に便所や風呂場を建て、すべて藁葺き屋根が一般的であった。

農村地帯では、今日その原形をとどめている家が時折残っているが、極めて稀である。

従って幕末から明治年代の木材の需要は限られており、それまでの城普請や藩庁の建物以外に大きな需要はなく、漁船（以前は軍船）や橋梁の他、運搬具の馬車及び家具・器具等が、その需要の主たるものであった。

然し維新後、富国強兵を国策として標榜するに至って、軍隊の兵舎や教育普及による学校校舎の増築・諸官庁の公共施設の他、民間の施設や個人住居も大型化し、木材の需要は急速に増加するに至ったのである。

建築用材、即ち松・杉・檜の造林に転換して三十年〜五十年間を周期に成木を伐採して販売、その後苗木を植えて、年々下刈りをなし、十五年経過後に、除・間伐してその生長を楽しみながら林業に励んだのである。

当地域の実情として、農地の狭い百姓は木材を育てるこ

とを副業として「自山」や「国有林」又は「部落共有林」や「所謂、山持ちの所有する山林」の作業に従事して生計を立てるに至ったが、林業がこの地域の産業として発展した歴史は、そう昔の事でなく、明治中期からのここ百年間と考えられる。

この地域は木材の集積地として、その存在が認められるにいたった。

然し乍ら、木材の原木は重・厚・長・大であつて、この伐採と重量物の運搬機器の開発・充足がなくては、人力では限界であるので、専ら牛馬の利用で、それをカバーしたのは極最近のことであつた。

藩政時代は、今より川幅も広く、また水量も多く堰も無かつたので、筏を組んで城下町の入口、角石まで運搬し揚陸したという記録がある。

現在の杉谷（百谷川口附近）に、明治大正時代は、木材・木炭の業者が集合していたことで証明される。

その後は、川下の住吉浜や向島地区に製材業者が多く立地した。

私の叔父（明治二十四年生・母の三つ年下で既に三十年ほど前に八十六歳で逝去）に、山仕事で若い頃から、弥生・

中野・因尾で植林・立木の手入れ、伐採に従事し、三十歳代で城東橋（現佐伯商工会議所玄関前）の付け根の場所（現伊予銀行敷地一帯）に貯木場を、山作石油店（中島通り入口前（現駐車場））に製材工場を持って、佐伯の業者としては比較的早い時期に創業して、木材業者と共に歩んだ身近な人間がいた。

私にとつても佐伯の林業と製材業の歴史（即ち近代化の足取りと景況による浮沈等）は、常に叔父から聞いており、部外者乍ら若干承知していた。

ここ百年即ち二十世紀の地域産業のトップバッターの役割を勤めた佐伯の林業、木材産業について述べたいと想う。

私の叔父が独立して製材業を始めたのは、大正初期で、その頃はまだ製材機運転は電力（モーター）でなく、廃材利用を利用したボイラーで、スチームエンジン（蒸気機関）を設備して稼働していた。

また製材機も現在のような帯鋸でなく、すべて丸鋸で作業していたので、製材成品寸法により丸鋸を大小取り替えて作業をしていたので非能率的であつた。

山元からの搬出は、すべて馬車で、毎日奥地からの輸送はせいぜい一回切りで、極めて輸送量が限定され、大量輸送は馬車台数を増やす以外になく、原木の供給から見ても生産規模の大型化は困難であった。

その後道路も漸次整備され、昭和時代になって漸くトラック輸送に進歩したので量産が可能になったが、これは大東亜戦争に突入した後で、馬車、トラック併用の時代が、戦後暫くまで続いたと記憶している。

大東亜戦争（昭和十六年十二月～昭和二十年八月十五日）突入後の海上輸送は、敵潜水艦の活動で大型の輸送船を次々に撃沈され、専ら戦時標準型の機帆船の大増産によって軍需物資の輸送を達成したので、佐伯の東九州造船（現本田造船）では、この船舶の消耗戦に対応した。

従って、木材業界は蔵専用木材の急増に答えたのみか、戦闘機その他兵器等の軍需にも対応したので、成木の伐採、運搬、製材工業は労働力不足を学徒（当時の中学生・女学生）などを動員して植林した歴史が物語として残っていたが、今日では、既に地域の話題にもならなくなった。

わが町佐伯をはじめ、周辺部の造林を始め木材関連業者

は戦争協力のため、昭和十六年十二月十八日佐伯木材株式会社設立して、佐伯市二十一社、津久見市二社、計二十三社の製材業者と佐伯市並びに南海部郡（津久見一社）の山林業者十一名で、資本金百万円の統制会社を設立して、臨時体制下における国防国家の木材政策遂行について、政府の要望により、確固たる生産力拡充のため交付された木材統制法の趣旨に従い、木材業及び製材業の企業合同をなし、これに森林所有者を加えた木材統合の中核たる株式会社を設立して政府の要望に越えた。

私は当時、満州国の国策会社に勤務しており、私の叔父が、この統制会社の常務に就任して、それ以前から取引のあった朝鮮京城（現韓国ソウル特別市）の二平合板株式会社の専務取締役の村上正三氏（社長村上弘一氏の実弟）に、今後は統制会社の取引になるので、従来の自由取引を中止して、國の統制下によって許認可を得なければ木材の取引は不可能になった旨、諒解を取り付けた。

挨拶に行った機会に、私の父と初めての海外旅行ということで（弟が昭和十七年三月に満州国建国大学に入学したこともあって）朝鮮経由で訪ねて来た。

父と叔父を奉天（現瀋陽）に迎えて、新京（現吉林市）や

旅順・大連旅行をして帰国してもらったので、佐伯にも木材の統制会社が設立され、戦時色が濃くなったことを承知した次第である。

又、終戦後朝鮮から引き揚げた二平合板株式会社の皆様、戦前の関係で佐伯市（佐伯港）が合板製造の工場立地に適していることを、かねてより承知していたので、叔父を頼って佐伯に合板工場を設立することになったのも奇縁と申すべく、又戦後に戦災復興のため木材合板を始め、セメント等資材の供給地として、佐伯港が物流基地となり、重要港湾の指定を受けた後の一連の港湾整備や発展は、二平合板株式会社を先駆けとして、初めて可能に成った次第である。同時に興人のパルプ原料のチップ輸入も木材輸入基地として、当市が九州一の地位を固めることに大きく寄与した次第である。

以上の如く、佐伯が第二次産業としての木材・合板・パルプと造船（昭和三十年頃から木造船から鉄鋼船に変わり大型化した）並びに鉄工の町となって、戦後いち早く大分市に次ぐ工業化に成功した足取りは、先ず嚆矢として木材産業であったことを申し上げたい。

私は、昭和四十二年六月に佐伯商工会議所会頭に就任後、佐伯木材協同組合の皆様と相計り、市内に散在する木材業者を、旧佐伯海軍航空隊跡地に誘致した興人工場敷地の遊休地の分譲を受け、木材団地を造成して第一次十三社、第二次十社、計二十三社の集結に成功した。

その後の団地の盛衰と業界の動向は、佐伯の主要産業の足取りを物語るものであり、又、港湾整備事業とも大きく関係するものであると考える。

私は、次の機会に、佐伯市と広域の南郡各町村の林業の振興と製材工場の戦後の集団化。成長経済の終焉を告げた第一次第二次オイルショック後、外材輸入の活発化での内地材に与えた影響。即ち、当時の木材業界が被った打撃、ひいては治山・治水の造林行政にまで影を落とした現況を申し上げたい。

猶、申し落としたが、わが直川では、何時の頃か定かでないが、造船材として宮崎県日南市一带に昔から造林を奨励された「飢肥杉」を導入して、特性を生かした特産材として業界に歓迎され、佐伯の戦後の木造機帆船用材として大きく寄与したという話を耳にしている。

果たして現状はどうであったのか調査してみようと思う。